

長崎唐人屋敷の範囲確定および敷地復元に関する研究*

A Study on area demarcation and site restoration of Nagasaki Toujinyashiki

岡林隆敏**・関曉麗***・前川裕之****・後藤恵之輔*****

By Takatosi OKABAYASHI・Xiaoli GUAN・Hiroyuki MAEKAWA・Keinosuke GOTOH

概要

長崎の「唐人屋敷」は、近世の日本史においてオランダ貿易の拠点である「出島阿蘭陀屋敷」と並び、徳川幕府の貿易政策を理解するための最重要施設である。しかし、公有化しないままに現在に至り、宅地開発などにより、境界が変化させられたために明確な範囲確定ができない現状にある。本研究は、GPS, GIS(地理情報システム)など最新の測量技術とコンピュータグラフィック技術を駆使して、唐人屋敷の範囲確定と敷地の復元を行ったものである。唐人屋敷範囲とその面積確定のための現地調査結果を踏まえ、絵図・古地図と現在の地図を使ったGISの処理、コンピュータグラフィックにより敷地構造の表現を併用した検討を行った。その結果、唐人屋敷の範囲、面積を確認することができた。また、コンピュータ技術を導入して、敷地の復元だけでなく、当時の絵図を合成することにより、唐人屋敷の状況は立体的に表現でき、より現実感のある復元が可能となった。

本研究は、絵図、古写真など歴史的資料のデジタル化と、地理情報技術の融合により、新しい土木史研究の実施方法を提案するものである。

1. はじめに

オランダ貿易の窓口であった「出島」は、1922年(大正11年)に国指定の史跡となり、その後、出島跡の土地が長崎市により購入され、現在、出島の建物の復元に至っている。これに対して、面積は出島の約2.5倍である「唐人屋敷」跡は、文化財の指定を受けることなく、さらに発掘調査による確認が困難な場所ができるなどして、唐人屋敷の範囲は、いまだ不明確なままで、現在に至っている。

しかし、唐人屋敷が、出島とともに、依然として、江戸時代における第一級の日本の重要な史跡であることには変わらない。唐人屋敷を通して輸入された物や文化は、江戸時代における日本人の日常的な生活と文化に決定的な影響を及ぼした。また、江戸時代の唐人屋敷を中心とする中国文化は、当時の長崎の生活様式に取り入れられ、

現在の長崎の文化として定着している。

「唐人屋敷」跡には、江戸時代当時の道路、石垣、空堀等の遺構が、現在でも多く残されている。唐人屋敷に関する調査・研究には、①唐人屋敷の歴史的研究^{1) 2)}②唐人屋敷内の建築的研究^{3) 4) 5)}③唐人屋敷遺跡調査^{6) 7) 8) 9)}などがある。これらの研究・調査により、唐人屋敷内の建築学的研究および唐人屋敷内部構造の範囲が推定されたが、唐人屋敷全域の範囲確定、復元までには至っていない。

本研究では、今後の長崎唐人屋敷の整備活用のために内部構造の遺構調査に加え、測量結果、GIS(地理情報システム)、コンピュータグラフィックスによる技術を用いて、唐人屋敷の範囲の確定および面積確定、と当時の敷地の立ち構造の復元を行った。

2. 唐人屋敷について¹⁰⁾

(1) 唐人屋敷の建設

図-1に長崎唐人屋敷の位置を、表-1に唐人屋敷の建設から解体、消滅への過程を示す。江戸幕府は、唐人によるキリスト教の伝播を防ぐことと、唐人の密貿易を防止することを目的として、長崎に来航する唐人を一定の場所に囲い込んで、出島のオランダ人と同様に中国人と一般日本人を隔離することを決めた。

*Keyword: 唐人屋敷、範囲確定、敷地の復元

**正会員 工博 長崎大学教授工学部社会開発学科

***学生会員 長崎大学大学院生産科学研究科

****非会員 工修 (株)パスコ

(〒153-0043 東京都目黒区東山1-1-2)

*****正会員 工博 長崎大学院教授生産科学研究科

(〒852-8521 長崎県長崎市文教町1-14)

1688 年(元禄元年)十善寺村幕府御菜園地で唐人屋敷の建設に着手し、翌 1689 年(元禄 2 年)に完成した。

まず竹林を伐り、懸崖を崩して地を均して石垣を築き、通路を設けて、上中下の区画を決めた。敷地整備後、上段より家屋の建築を始めた。広さは約 9,400 坪であったとされている。周囲を練堀で囲み、その外側に水堀あるいは空堀を、さらに外周には一定の空地を確保し、竹垣で囲われていた。

入口には門が二つあり、外側の大門の脇には番所が設けられ、無用の出入りを改めていた。二ノ門は役人であってもみだりに入ることは許されず、大門と二ノ門の間に乙名部屋大小通事部屋などが置かれていた。内部には、長屋数十棟が立ち並んでいたといわれ、一度に 2,000 人前後の収容能力を持っていた。域内は、長崎奉行所の支配下に置かれ、管理は町年寄以下の地役人によって行われていた。唐人屋敷は唐人船載の輸入品の処置が完了するまで、一時唐人を在留させる特別区域であった。

(2)唐人屋敷の解体と変遷

1858 年(安政 5 年)、英・米・蘭・露・仏の 5 カ国との間に修好通商条約が締結され、函館・神奈川・長崎の 3 港が開港されることとなった。これにより、わが国唯一の貿易港として開かれていた長崎の唐人貿易は、その特権を失った。

明治維新を迎えると、唐人屋敷が解体され、居留中国人は、貿易の前線に近い「新地蔵」に移動した。1870 年(明治 3 年)には、唐人屋敷全域が火災になり、その衰退・消滅に拍車をかけることとなった。その後、唐人屋敷は日本人街化して周囲の住宅に埋没していった。

明治初期から現在まで、唐人屋敷の跡地は、約 130 年の間に崖地の取り崩しや敷地の改変が行われ、唐人屋敷の範囲ばかりでなく、当時の工作物(堀、道路、屋敷敷地、石垣など)の残存状態が明確ではなくなっているという状況である。

3. 範囲確定方法と 3 次元グラフィック化

(1)唐人屋敷範囲および面積の確定方法

本研究では、唐人屋敷の範囲を、唐人屋敷の外廓である竹矢来の範囲と唐人屋敷の居住空間である堀の中の部分と定義する。

唐人屋敷の外廓は、現在では遺構が全く存在せず、さらに、現在の地図と参照すべき当時の絵図の歪みから、厳密な推定は困難である。

1) 範囲確定調査

- ①詳細な現地調査：唐人屋敷における遺構(石垣、石段、道路路線、水路、空堀、敷地)調査を行った。
- ②広域的な絵図・古地図と現在の地図の合成：GIS の処理を併用した。なお、本研究で用いた GIS ソフトウェアは Arc View GIS 3.1(ESRI 社製)である。
- ③主要部の考証：当時と現在では大きく変化している不確定な部分について、唐人屋敷範囲確定のための主要

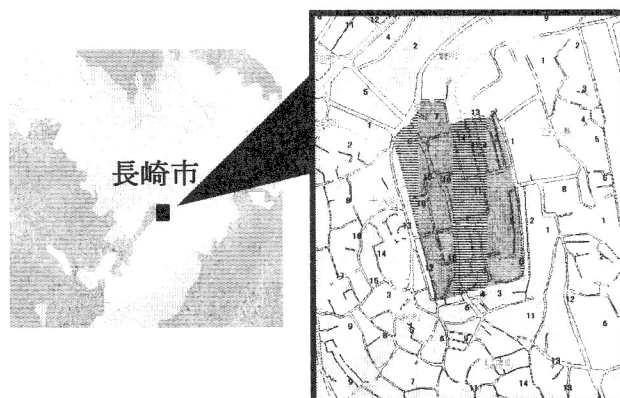


図-1 長崎唐人屋敷の位置

表-1 唐人屋敷の変遷

年代	唐人屋敷の変遷
1688(元禄元年)	唐人屋敷の建設を起工
1689(元禄2年)	入港の一番船の乗員を収容した箱館、神奈川、長崎の3港が開港された
1858(安政5年)	長崎外国人居留地の建設が始まった
1859(安政6年)	唐人屋敷の「奥地化」「内陸化」
1866(慶応2年)	唐人屋敷大門が朝六時から暮六時まで開放された
1867(慶応3年)	大門、二ノ門とも門限が廃止され、唐人屋敷が開放された
1868(明治元年)	唐人屋敷全域が火災により焼失した
1870(明治3年)	日清通商条約が結ばれた
1871(明治4年)	唐人屋敷が日本人街化
1900(明治32年)	

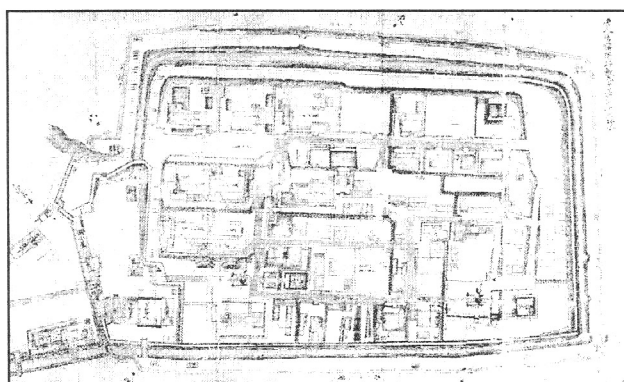


図-2 唐人屋敷図『長崎諸役所絵図』¹¹⁾

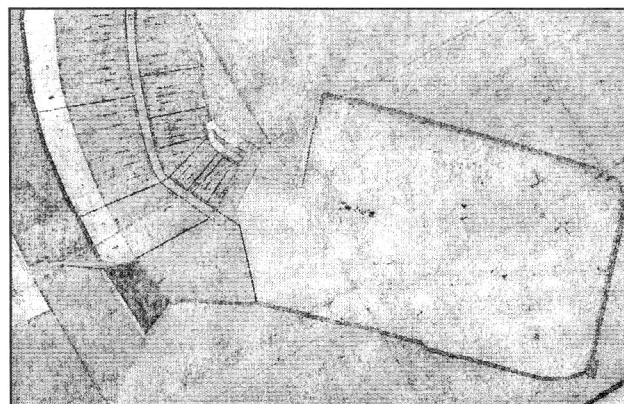


図-3 唐人屋敷付近『長崎総町絵図』¹²⁾

部をもとにして考証した。

2) 面積確定

文献調査と絵図・古地図による記述と範囲確定調査結果を基に当時の面積を算出した。

なお、唐人屋敷の範囲確定および面積確定のために用いた絵図、古地図、資料を以下に示す。

- ①「長崎諸役所絵図」：長崎県立図書館蔵、1808年(文化5年)(図-2)
- ②「長崎総町絵図」長崎県立図書館蔵、(江戸中期)(図-3)
- ③「御普請方絵図」長崎県立図書館蔵、1688～1703年(元禄年間)(図-4)¹³⁾
- ④「長崎実録大成」田辺茂啓、1760年(宝暦10年)¹⁴⁾
- ⑤「1/500 長崎市地形現況図」長崎市役所¹⁵⁾

(2) 唐人屋敷の敷地の復元方法

唐人屋敷の敷地構造を表現する方法の一つに、模型による表現が考えられるが、本研究ではGISとコンピューターグラフィックによる復元を以下の手順で行った。

- ①唐人屋敷が存在したとされる範囲および周辺の測量(現地測量とGPSによる併用)
- ②測量したポイントのデータを、GISで作成した地図データに入力
- ③家屋・敷地・堀・道路それぞれのポリゴンの作成
今回の敷地作成において、家屋の敷地は平坦であると仮定した。家屋と敷地ポリゴンの標高データは、測量と地図上の測量ポイントデータから割り出して入力した。道路ポリゴンの標高データは既存の測量データを用いた。

④TIN(Triangulated Irregular Network)の作成

TINとは、トポロジ構造をもつベクトル型データモデルであり、家屋・敷地・堀・道路のTINを作成した。

図-5にポリゴン作成画面の一例を示す。

⑤3D Analyst(ESRI社製)で表現

2次元で作成したTINを3次元グラフィックで表現した。図-6にTIN作成画面の一例を示す。

4. 唐人屋敷範囲確定のための現地調査

図-7に筆者らが現地調査を行ったポイントを示す。¹⁰⁾

①館内町の入り口であり、唐人屋敷大門の場所に対応している。②石垣遺構であり、当初、二ノ門から続く石垣と考えていたが、その後調査により、後から付け加えた石垣であると推定した。③唐人屋敷西側の水路であり、建設当時のもの。④唐人屋敷南側の堀の場所と推定され、現在でも側溝である。⑤唐人屋敷南側の崖地であり、発掘により当時の石垣が現れている。⑥唐人屋敷南東端であり、発掘により初めて空堀が確認された。一部分、外から見えるように処理されている。⑦東側の崖地であり、幕末には比較的緩やかな勾配の斜面であったことから、後の宅地造成により地形が大きく変化したものと思われる。⑧長崎市立佐古小学校南の階段付近である。建設当時はこの通路は無いため、後に大学病院、大

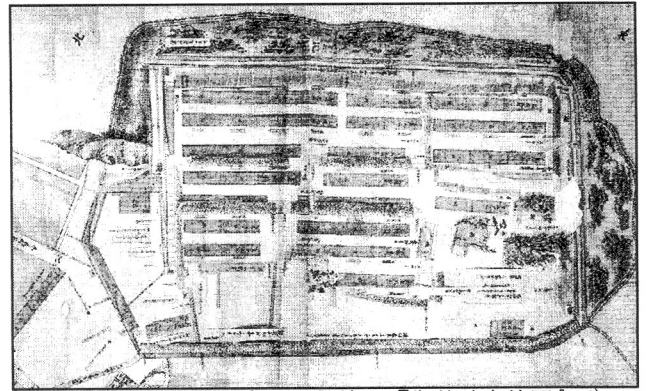


図-4 創建当時の唐人屋敷絵図『御普請方絵図』¹³⁾



図-5 ポリゴン作成画面の一例

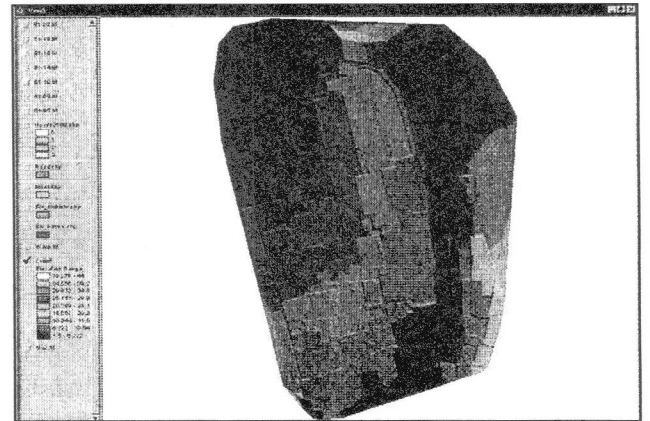


図-6 TIN作成画面の一例

徳寺に抜ける通路として造られたものと考えられる。⑨唐人屋敷の北東隅である。この場所は唐人屋敷の古絵図と大きく変化している場所である。後ほど考証するが、明治以降地形の改変がなされたのではないかと考えられる。⑩十善寺病院に隣接する場所であり、この場所も後の時代に大きく土地の改変がなされたと考えられる。⑪土神堂、⑫天后堂、⑬観音堂である。

現地調査の結果としては、全体的にみて唐人屋敷形成当時の土地形成とほとんど変化がなく、館内町全体がいまだ唐人屋敷を形成しているように、当時の遺構が多数現存している。敷地の階層は、唐人屋敷形成当時より分割され、住宅の築造や町の開発等による地形の変化から

形成当時の敷地割と多少の相違が生じているが、基本的に全体の形状はほとんど変化していないと思われる。
次に、表-2 に現地調査による確定部分および不確定部

分を整理した。不確定部分に関しては、当時の絵図と大きく変化している場所であると推定し、確認が必要であった。

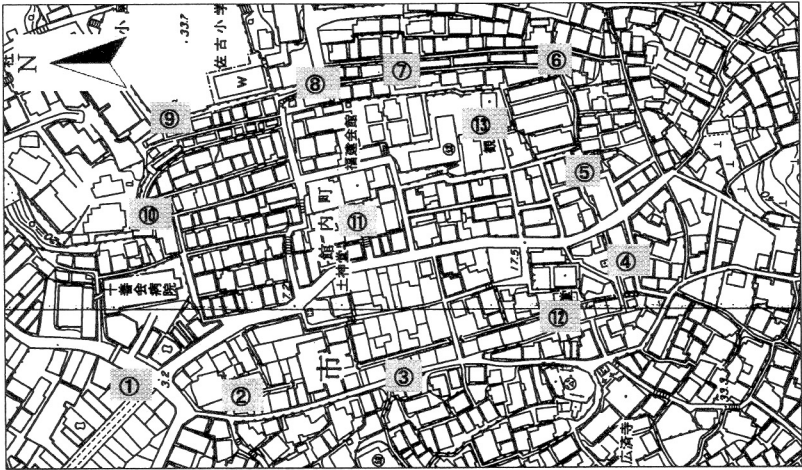
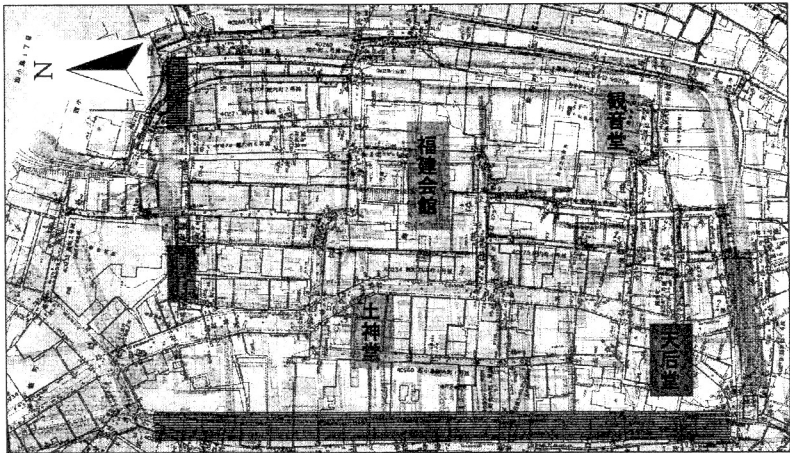


図-7 唐人屋敷範囲確定のための調査地点



南隅空堀遺構
 南側側溝、石垣遺構
 北隅
 西側水路
 十善寺病院隣接部分
 北側崖地

図-8 『長崎諸役所絵図』と現在の地図との合成図

表-2 現地調査による確定部分及び不確定部分

確定部分	不確定部分
・ 西側の水路 ・ 南側の側溝、石垣遺構 ・ 南隅の空堀遺構	・ 北側の崖地 ・ 北隅 ・ 十善寺病院隣接部分

5. 範囲確定のための地図情報の照査と唐人屋敷範囲の確定

(1) 古絵図と現在の地図との合成

図-9a)に「長崎諸役所絵図」と現在の地図の合成図を示す。線の濃い部分は現在の地図である。それ以外の薄い部分は「長崎諸役所絵図」である。なお、GISにおいて当時の絵図と現在の地図の座標を照合させるために、唐人屋敷内部では、当時のものであると確定されている土神堂、天后堂、観音堂および表-2の確定部分を主要参照点として選んだ。これにより、街路の骨格、道路幅や外郭、北側斜面の整合性を確認することができる。

しかし、唐人屋敷西側と北側については、確実な参照点がない。そのために、不確定な部分については、以下に示す主要部の考証を行った。

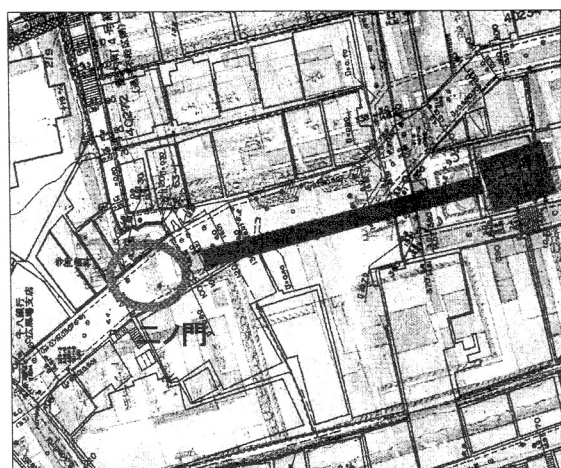
(2) 唐人屋敷大門位置の確定

唐人屋敷における範囲確定の中で最も困難であったのが、大門の位置の確定である。今回使用した古地図「長

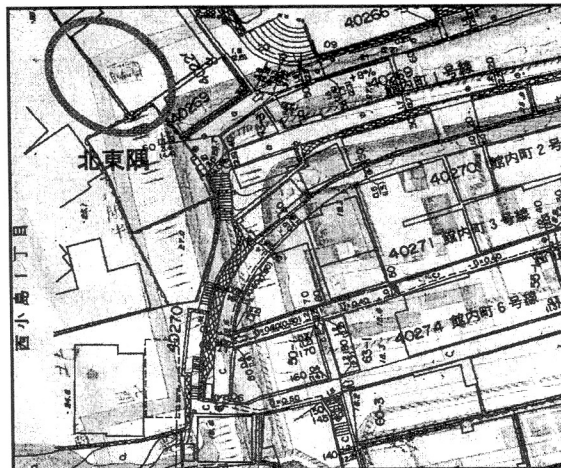
崎諸官公衛図」は前述したように、二ノ門内における石垣、石段、道路路線、堀、歴史的建築物(3つの御堂)等の位置関係が、非常に正確に描かれていた地図である。

しかし、図-9a)の大門付近の整合性をみると、大門外の本籠町への道路路線、広馬場商店街付近が大きくずれていること、大門～二ノ門間の敷地のずれをみることができる。また、大門外の本籠町への道路路線、広馬場商店街付近が大きくずれていることが分かる。このことから、「長崎諸役所絵図」は、唐人屋敷の二ノ門内の唐人屋敷についてのみ正確に描かれている地図であるといえる。大門の位置は、図-9a)のみでは確定できない。

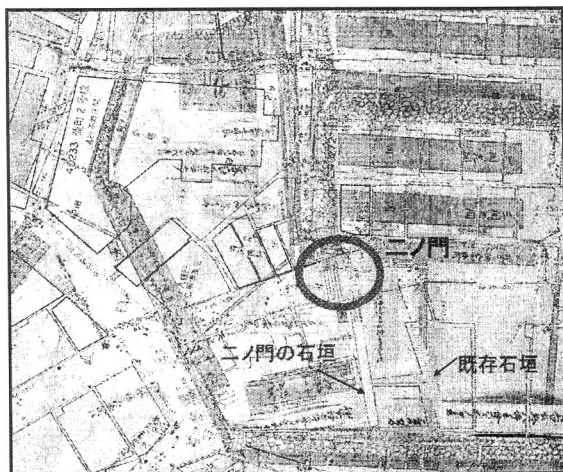
そこで、本籠町と大門の関係をより詳細に表現した地図である「長崎総町絵図」と「御普請方絵図」を用いて現在の地図に合成した。図-9b)、c)にそれらの合成図をそれぞれ示す。その結果、大門～二ノ門間や本籠町の道路がほぼ一致することがわかった。図-9a)、c)により、大門の位置が確定できた。



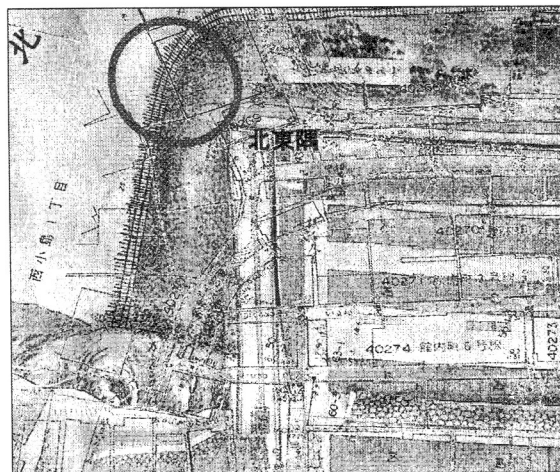
a) 「長崎諸役所絵図」



a) 「長崎諸役所絵図」



b) 「御普請方絵図」



b) 「御普請方絵図」

図-10 二ノ門付近の古地図と現在の地図合成

図-11 東北隅付近の古地図と現在の地図合成

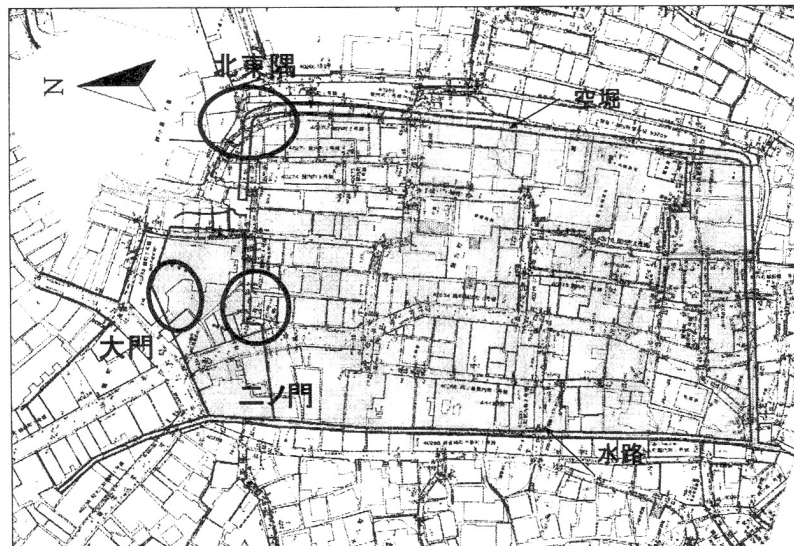


図-12 唐人屋敷の範囲確定

(3) ニノ門位置の確定

これまでの調査研究や著者等の現地調査から、四海楼駐車場の既存の石垣が二ノ門の遺構であると考えられていた。しかし、図-10a), b)に示す「長崎諸役所絵図」および「御普請方絵図」と現在の地図との合成図をみると、いずれの場合でも、既存の石垣と当時の二ノ門の位置がずれている。著者等は、二ノ門の位置が、「長崎諸役所絵図」および「御普請方絵図」の場所である(二ノ門の石垣は既存の石垣より大門側である)と仮定し、既存の石垣は、後の時代に造られたものであると推定した。また、当時二ノ門から土神堂に向かう道路が一直線に伸びていることから、土神堂から位置を判断できる。さらに、門の構造から考えて、二ノ門の位置は「御普請方絵図」により確定した。色の濃い線の部分は現在の地図を示す。それ以外の部分は「長崎諸役所絵図」と「御普請方絵図」である。

(4) 唐人屋敷北東隅の確定

唐人屋敷の北東隅は他の場所と異なり、当時の地形と現在の地形が大きく変化しているため、範囲確定が困難であった。図-11a)に「長崎諸役所絵図」と現在の地図、図-11b)に「御普請方絵図」と現在の地図の北東隅付近の合成図を示す。図-11a), b)を見ると分かるように、現在の地図と「長崎諸役所絵図」および「御普請方絵図」の地形が大きく変化していることが分かる。原因として、1861年(文久元年)、県立長崎病院の養成所と医学所が、現在の長崎市立佐古小学校および大徳寺跡付近に設立されたことが挙げられる。また、1877年(明治10年)以降に県立長崎病院の拡大に伴って周囲の土地の大改造計画が行われ、土地が掘削されたのではないかと考えられる。実際に県立長崎病院は幾度かの改装工事を行い、土地の整備を行っている。¹⁶⁾このことをふまえて、図-11a), b)のように江戸時代の古地図は現在の地図と異なっていることから、古地図の構成を唐人屋敷の範囲とする。すなわち、大徳寺跡の門から十膳会病院の上まで直角に堀がくるものとして、これを唐人屋敷北東隅の範囲確定とする。

(5) 唐人屋敷の面積と範囲

前述した(2)(3)(4)により、長崎唐人屋敷全域の範囲確定がされた。図-12に唐人屋敷の全域における範囲の確定図を示す。

次に唐人屋敷の面積について考える。唐人屋敷の総面積に関しては、参考とした絵図のなかでも、鮮明でよく知られた「長崎諸役所絵図」に記述されている9363坪余を公称面積とした。地図の記述は、文献の記述と比べて、曖昧さが残るが、唐人屋敷内部の建物との関係で面積をみることができるために、歴史的変遷と面積の変化を確認することができる。

また、「長崎実録大成」に記述されている唐人屋敷内部の面積値から端数を切り捨てたものを公称面積とし、表-3に示す。

図-12より算出した二ノ門内唐人屋敷構内の面積は6,877.483坪、大門と二ノ門外間の面積は654.180坪である。この面積が、ほぼ公称値と対応していることから、図-12に示す唐人屋敷の範囲は妥当であると考えられる。

表-3 唐人屋敷内部面積の公称値提案

	面積	
	坪数	m ²
二ノ門内の唐人屋敷構内	6874	26,664
大門と二ノ門外の間	654	2,537
外廓竹垣の内	1835	7,118
唐人屋敷総坪数	9363	36,319

※面積の換算率は1坪=3.3057812 m²

6. 唐人屋敷の敷地の復元

(1) 現在の唐人屋敷の敷地構成

唐人屋敷の範囲を示す明確な遺構は、唐人屋敷の範囲を示す水路や空堀などの工作物である。唐人屋敷跡には大規模な建築物が建設されなかったために、唐人屋敷敷地遺構が攪乱されることなく、現在まで残されてきた。ほぼ当時の状態で残されている唐人屋敷の敷地の構造も、唐人屋敷の重要な遺構である。しかし、敷地の構造は面積が広く、建物に隠されているために、直接これを見ることができない。

なお、形成当時の長崎唐人屋敷の敷地を復元するための標高に対する資料が存在しないため、形成当時の敷地を復元するためには、現在の唐人屋敷跡の敷地復元図をもとにして復元を行う必要がある。

そこで、現在の唐人屋敷跡における敷地の復元を行い、それを元にして形成当時の長崎唐人屋敷における敷地の復元を試みた。現在の地形の3次元表現を行う際に、長崎市の道路台帳を基礎として、内挿の必要な点は測量を行った。測量ポイントは全部で321カ所である。GISのソフトウェアを用いて、現在の唐人屋敷跡の3次元の立体地形図を構成した。図-13に、現在の唐人屋敷の敷地構成を示す。

(2) 当時の唐人屋敷の立体表示

形成当時の唐人屋敷を復元するための標高に関する資料

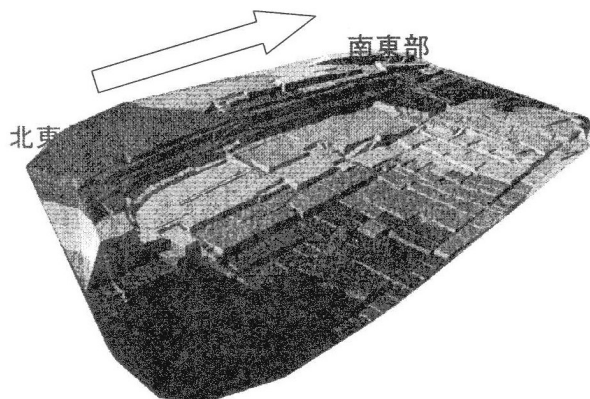


図-13 現在の唐人屋敷跡の敷地構成

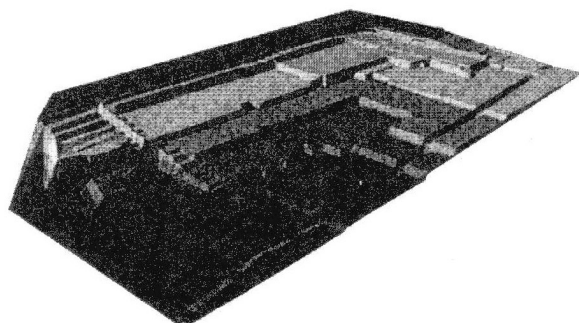


図-14 形成当時の唐人屋敷の敷地構成

は存在しない。よって、図-13に示す現在の唐人屋敷跡の敷地構成から、唐人屋敷の形成当時の地形を推定する。図-14に、形成当時の唐人屋敷の敷地構成を示す。

次に、図-15に、形成当時の唐人屋敷の敷地構成である図-14と「長崎諸役所絵図」とを合成図江戸期における唐人屋敷の復元図を示す。これにより、道路の位置、道路の幅、さらに石垣の位置が一致していることがわかる。

図-16は、現在の唐人屋敷跡の敷地構成である図-13と「御普請方絵図」との合成図である。図-15と比較して、石垣や道路などが明治以降、現在までに改変された痕跡をみることができる。

(3) 形成当時と現在の唐人屋敷における敷地の変化

長崎唐人屋敷の形成当時と現在の敷地を比較した。図-14は形成当時の唐人屋敷の敷地構成図で、図-13は現在の唐人屋敷跡の敷地構成図である。

唐人屋敷形成当時の敷地において、二ノ門内(唐人屋敷内部)は、大きく5階層に分割されている。まず、二ノ門から土神堂までの部分、そこから順次1段ずつ昇った4つの部分から構成されている。南東部が敷地内の最も高い部分となる。

図-13に示す現在の敷地構成と、形成当時の唐人屋敷敷地構成とを比べると、現在の敷地構成が、階層は当時より細かく分割され、その後、住宅の建築や町の開発等による地形の変化により、形成当時の敷地割りと多少の相違が生

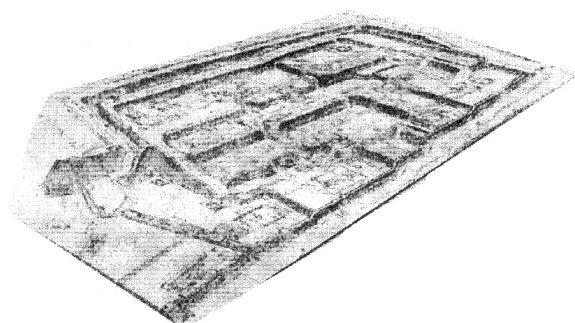


図-15 形成当時の唐人屋敷敷地構成と『長崎諸役所絵図』との合成図

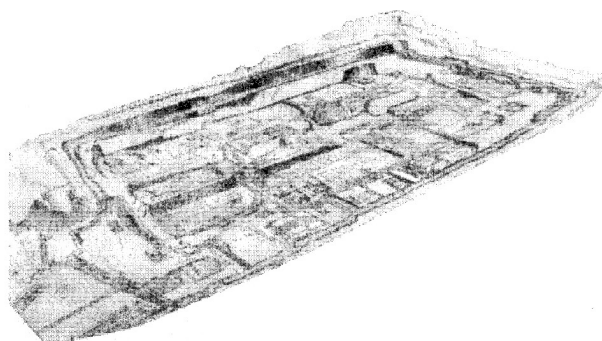


図-16 現在の唐人屋敷の敷地構成と『御普請方絵図』との合成図

じている。しかし、全体の形状はほとんど変化しておらず、当時の唐人屋敷がそのまま現在の館内町の地形を形成していることが確認できる。このことから、現在の敷地に当時の唐人屋敷の敷地を復元することが可能であることがわかった。

唐人屋敷の範囲確定と唐人屋敷の敷地遺構の保存状態調査は、唐人屋敷の保存状態を判定するために重要な作業である。唐人屋敷は出島の約2.5倍あり、面積が広く、さらに住宅が密集している。勾配のある斜面地の段々畑を造成して唐人屋敷の施設を建設したために、唐人屋敷は高低差のある敷地構造になっている。唐人屋敷の敷地構成は、模型を作成することにより表現することができるが、コンピューターグラフィックにより表現することで、絵図を合成するなど、2次的な加工が可能である。

7. おわりに

近年、都市自治体における都市景観行政における歴史的建造物の復元・修復・活用が盛んとなってきている。

筆者らはこうした背景の下、長崎市における唐人屋敷の復元の可能性の検討を行った。その結果、以下のことが示された。

(1)歴史的史跡である長崎唐人屋敷の調査における範囲の確定において、詳細な現地調査を元にGISを用いた範囲の検討を行った。検討には、唐人屋敷を3カ所に分け、部分的に範囲の確定を行い、その後唐人屋敷全域の範囲確定を行った。これにより、今まで不確定であった形成当時の長崎唐人屋敷全域における範囲の確定ならびに大門、二ノ門の位置の確定ができた。

(2)「長崎実録大成」に記述されている唐人屋敷内部の面積から端数を切り捨てたものを公称面積として提案した。また、唐人屋敷範囲確定図より算出した二ノ門内唐人屋敷構内の面積は6,877.483坪、大門と二ノ門外間の面積は654.180坪(36,319㎡)である。この面積が、ほぼ公称値と対応していることから、唐人屋敷の範囲確定は妥当であるものと考えられる。

(3)現在の長崎唐人屋敷跡における敷地の復元図を元に形成当時の唐人屋敷における敷地の復元を行い、比較を試みた。その結果、現在の敷地の方が、詳細な情報により忠実に復元されていることもあるが、階層は当時より細かく分割され、住宅の建築や町の開発等による地形の変化などにより、形成当時の敷地割りと多少の相違が生じている事がわかった。しかし、全体の形状はほとんど変化しておらず、当時の唐人屋敷がそのまま現在の館内町の地形を形成していることが確認できた。

これにより、現在の敷地に当時の長崎唐人屋敷を復元することが可能であることが分かった。そして、今後の唐人屋敷の整備活用、さらには長崎唐人屋敷の観光地としての活用を行っていくうえで、敷地の復元は有効であると考えられる。

謝辞

なお、本研究は平成13年、長崎市が唐人屋敷顕在化事業を推進する際に、長崎市から受託研究の依頼を受けて長崎大学(工学部社会開発工学科)が行ったものである。測量業務および地理情報システムの処理については、扇精工(株)に業務を委託した。

参考文献

- 1)山本紀綱：唐人屋敷，pp.197-220，pp384-416，兼光社，1983年
- 2)関西大学東西学術研究所「長崎唐館図集成-近世日中交渉史料集六」，pp.220，224，関西大学出版部，2003年
- 3)李陽浩、永井規男：元禄年間における長崎唐人屋敷の構成について，日本建築学会計画系論文集，第482号，pp.175-184，1996年
- 4)李陽浩、永井規男：都市史料としての長崎唐人屋敷図の検討，日本建築学会近畿支部研究報告集，9006，pp.1157-1160，1996年
- 5)李陽浩、永井規男：唐人屋敷の建築的研究，日本建築学会近畿支部研究報告，9007，p1029-1032，1994年
- 6)北垣聡一郎：館内町33街区(旧唐人屋敷)遺跡遺存状況調査にかかる所見，奈良県立橿原考古学研究所，1995年
- 7)長崎市教育委員会：『唐人屋敷跡』，長崎市館内町33番1における埋蔵文化財発掘調査報告書，2001年
- 8)長崎市教育委員会：『唐人屋敷跡』，十善寺地区コミュニティ住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，2001年
- 9)岡林隆敏：唐人屋敷範囲確定及び遺構調査に関する報告書，長崎市，pp.5-7，2002年
- 10)山本紀綱：唐人屋敷，pp.197-220，pp384-416，兼光社，1983年
- 11)長崎諸役所絵図，長崎県立図書館蔵，1808年(文化五年)
- 12)長崎総町絵図，長崎市立博物館蔵，江戸時代中期
- 13)御増請方絵図，長崎県立図書館蔵，1688~1703(元禄年間)
- 14)田辺茂啓：『長崎実録大成』，長崎県立図書館蔵，1760年(宝暦10年)
- 15)1/500長崎市地形現況図，長崎市役所
- 16)青木義勇：明治初期の長崎医学校・病院概述、特に建造物の復興と戦時仮病院指定二回目の経験，長崎談叢第67輯，pp.36-108，1983年